

---

# 日の光は氷を溶かすように雲を抜けて

上原直也

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

日の光は氷を溶かすように雲を抜けて

### 【Nコード】

N5572G

### 【作者名】

上原直也

### 【あらすじ】

生きていると、色々上手くないことや、辛いことがある。幸せのような、そうでないような。迷ったり、傷ついたり、立ち止まったり。前向きに生きようとして、でもなかなかそうできなくて。二十代半ばを迎えた女性の日常や想いを描いた小説です。

車の窓から明るい日の光が差し込んできている。でも、それは窓ガラスの色素を微かに含んで、ほんの少し、どこか陰鬱に、翳って見えた。

「聞ってる？」

横から隆俊の声が響いた。

少し驚いて振り向くと、運転席に座った隆俊が困ったような笑顔でこちらを見ている。

いま信号は赤で、その信号待ちのあいだに隆俊がわたしに何か話しかけてきたらしい。けれど、わたしは考え事をしていたせいで、何も聞いていなかった。

「ごめん」

わたしは苦笑して謝った。

「ちょっとぼおっとしてた」

「良美がぼうつとしてるのはいつものことだよね？」

「うるさい」

わたしは笑って答えると、

「で、なんの話だった？」

隆俊に改めて訊きなおした。

信号が青に変わったので、隆俊はわたしの顔に向けていた視線を正面に戻すと、車を走らせた。いつも来るたびに思うことだけれど、名古屋の道路は東京とは違って車線が広々としているなぁとわたしは感じる。

「来月のことだよ」

隆俊はしばらくしてから口を開くと言った。

「来月の二十日って、俺たちが付き合いはじめてから三年目の記念日じゃん？その日、日曜だし、俺も休み取れそうだから、どうしようかなって思ってた」

「ああ」

と、わたしは曖昧に微笑して頷いた。

「ひでえ。もしかして、忘れてた系スカ？」

と、隆俊はおどけた口調でわたしを責めた。

「ンなわけないじゃん」

と、わたしは笑って答えながら、もう三年か、と、改めて月日が流れる速さに驚きを感じた。

わたしと隆俊が付き合うようになったのは、大学三年の秋だ。わたしと隆俊は同じ大学通っていて、同じサークルに入っていた。そして隆俊に告白されて付き合うようになった。

隆俊のことは好きだ。その気持ちは付き合い合ってから三年が経とうとしている今でも変わらないと思う。いや、むしろ、歳月を重ねた今では、付き合い始めた頃よりもその思いは強くなっていると感じる。このまま隆俊と結婚したりするのかなあと思ったりもする。

隆俊は大学を卒業したあと、商社に就職して、いまは名古屋にある営業所に勤めている。わたしは大学を卒業したあと東京の保険会社で働いていて、だから、いま隆俊とは遠距離だ。

平均して月に二回くらいこうしてわたしが隆俊のいる名古屋に遊

びにいつている。もし、隆俊と結婚したら、わたしは名古屋に住むことになるのだろうか。

わたしは名古屋で生活している自分を上手く想像することができなかった。隆俊と生活を伴にしている自分も。想像しようとすると、まるでさっき車の窓から差し込んでくる光を目にしたときのように、その映像は、微かに、ぼんやりと、濁ってしまう。

「で、どうする？」

と、わたしが黙ってそんなことを考えていると、横から隆俊が催促するように言った。

「どうするって？」

わたしが訊きかえすと、隆俊はそれとわからないほどの微かさで苛立ったような表情を浮かべると、

「だから、来月だよ。良美は何かしたいこととかある？」

と、訊いてきた。

「うーん。どうしようかな」

わたしは曖昧に笑って答えた。

「どこか高いレストランでパッと豪華な食事でもするか？」

隆俊は気を取り直したように明るい口調で言った。

「そうだね」

と、わたしは頷いた。けれど、その頷いたわたしの声は、そんなつもりは全くなかったのに、まるで愛想のない、ただの相槌を打っただけのような響き方をしてしまった。

咄嗟に、わたしはしまったなと後悔したけれど、でも、そう思ったときにはもう遅くて、隆俊はちらりと横目でわたしの顔を見ると、「なんだよ。気に入らない？」

と、非難するように言った。

「何か他に良い案があるなら言ってくれよ」

と、隆俊は少し怒ったような口調で続けた。

「べつにそんなんじゃないってば」

わたしは笑って取り繕った。

「そんな棘のある言い方しないでよ」

そう続けたわたしの言葉に、隆俊は明らかに気分を害した様子で、黙っていた。

「豪華な食事かー。じゃあ、フランス料理とかいいな。わたしあんまりそういうところ行ったことないんだよね」

わたしはなんとか隆俊に機嫌を直してもらおうと、殊更に明るい口調を装って続けたけれど、隆俊は相変わらず黙りこんだまま、何も答えなかった。

そのうちに信号が赤に変わって、わたしと隆俊の乗った車は前方を走っている車に続いてゆっくりと停車した。そう。ゆっくりと。まるで目に見えない壁にぶつかるみたいに。

## 2

### 1

「うるせえ！」

「親に向かってうるさいとは何だ」

「うるせえから、うるせえつつてんだよ」

「俺はお前のためを思って言ってるんだよ」

「ほんとに俺のことを考えてくれてんなら、なんでそんなことしか言えねえんだよ。お前が考えてんのはどうせ世間体とかそういうことだろうが」

「親に向かって、お前とは何だ！」

リビングでしている父親と兄の口論が、わたしの部屋まで聞こえてくる。最近は毎日のように父親と兄の口論の声を聞く気がする。わたしはうんざりした気持ちになって、リモコンでテレビのボリュームを最大限まであげた。

わたしは大学を卒業した今でも実家住まいをしている。働いている会社が実家から通える範囲にあるので、あまり一人暮らしをする必要性を感じないのだ。それに実家の方が何かと楽だ。炊事も洗濯もお母さんがやってくれるので何もしなくてもいいし、家賃が発生しないから、その浮いたお金を貯金に回すことだってできる。もちろん、ある程度のお金は家に入れているけれど。

でも、最近は、父親と兄の口論のせいで、真剣に家を出ることを考えるようになった。

父親と兄が頻繁に口論を繰り返すようになったのは、兄が勤めていた会社を辞めた頃からだ。兄は大学を卒業したあと比較的に大手の食料品会社に勤めていたのだけれど、今から二年程前に、マスコミ関係の仕事がやりたいと言い出して、勤めていた会社を突然辞めてしまったのだ。

兄が勤めていた会社を辞めてしまったことを知った父親は激怒した。父親は兄に向かって、この就職難の時代にマスコミの仕事になんてつけるはずがないし、せっかく安定した収入を得ることができると会社に勤めることができていたのに、どうしてそれを辞めてしまうのだ、と、難詰した。その父親の言葉に対して、俺は自分のやりたいことをやりたいのだ、と、兄は反論した。あとは非難の応酬になった。

兄も会社を辞めたあとすぐにマスコミの仕事に就くことができていれば、今ほど父親との関係も冷え込まなかったのだろうけど、運が悪くと言うか、やっぱりと言うか、兄はなかなかマスコミの仕事に就くことはできなかった。そしてそれは今でも変わっていない。

兄もそれなり真剣に就職活動に取り組んでいる様子なのだけれど、マスコミという業種は余程人気が高いのか、それとも兄の努力が足りないのか、あるいはどちらもなのか、とにかく、今のところ兄が内定をもらったという話はきかなかった。

会社を辞めてから二年が経とうとしている兄に対して、父親は痺れを切らして、以前にも増して色々と言った。それに対してまた兄が反論する。最近はその繰り返しだ。状況はどんどん悪くなっていつている。どこか暗い場所にもうスピードで



転がり落ちていくみたいに。

最近、兄は以前に比べて暗くなったと思う。大学を卒業する頃くらい前までは明るくて、優しく、冗談なんかもよく言ったりする方だったのに。

近頃は家に居るときは必要のない限り自分の部屋から出てこないし、たまにリビングなどで顔を会わせたときにわたしが声をかけても、まともな返事は返ってこない。いつも顔を俯けて、どこか不機嫌そうな表情でいる。

きつとたぶん、兄はいまの自分が嫌いなのだろう。いまの自分の状況が情けなくて、許せてなくて、悔しくて、だから、どうにかその状況から抜け出そうとしてもがいている。でも、もがいても上手くいかない。むしろ、もがけばもがくほど状況は悪くなっていく。そのうちにイライラしはじめる。色んなことが腹ただしく感じられるようになる。心が暗く濁って、わたしや家族やみんなに対してどこか敵意的になってしまふのだろうとわたしは想像する。

だけど、父親も父親だとわたしは思う。どうして父親も兄に対してあんなにヒステリックなまでに早く就職することを求めるのだろう。安定。安定。将来。将来。父親が口にするのはそればかりだ。

もちろん、安定も、将来のことも大事かもしれないけれど、でも、そのことばかりを口にする父親は、なんとなく狭量な気がしてしまう。保身のことばかり考えている小さな人間のように思えてしまう。わたしの父親はこんなに保身や世間体ばかりを気にするひとだったのかと少し幻滅すらしてしまう。自分の子供のことが心配なのはわかるけれど。

というより、このわたしの身の回りにある、ぼんやりとした閉塞感は何だろうと、心のなかでため息をつく。

「でも、実際、あなたは恵まれてるんですよ」

と、テレビ画面のなかで、着物を着た小太りの男のひとが、最近有名になりはじめた二十代前半の女優にアドバイスをしている。なんでもこの着物を着た小太りの男のひとには霊能力があって、守護霊とかそういう存在と対話することができらしい。

「そうですかね」

アドバイスをされた女優は少し困惑した笑顔で首を傾げている。

「わたし小さいときから苦労ばかりしてて、とてもそんなふうには思えないんですけど。今だって色々・・・」

「でも、それは贅沢ですよ」

小太りの男のひとは微笑んで女優の科白を否定する。

「だって、あなたいま健康で、こんなにも世間のたくさんの方から必要とされてるんですよ。それを幸せと呼ぶなくてなんて呼ぶんですか？世の中にはもっともっと辛い状況や環境に置かれているひとたちだってたくさんいるんですから」

「・・・そうですね」

小太りの男のひとが口にした言葉は、どこかで聞いたことがあるような言い回しだったけれど、でも、確かにその通りかもしれないな、と、たったいままで抱いていた自分の感情をわたしは反省させられた。わたしの、いまの自分がそれほど幸せだとは実感できない気持ち。どちらかというと、不幸のように感じていた自分の想い。

確かに、わたしはいまのところ健康だし、生活に困っているわけではない。家庭環境にしたって、父親と兄の関係が最近いくらギクシャクしているとはいっても、そこまで深刻なわけではないし、わたしには親友と呼べるひとたちだって何人かいる。

おまけに、わたしには自分のことを好きでいてくれる恋人さえいるのだ。これ以上のことを望むのは、確かに、少し贅沢かもしれないな、と、気がつかされる。

・・・たぶん、わたしはいま幸せなのだろう。そう。幸せ。だけど・・・そのはずなのに、いまの自分の現状を心の底から幸せだとは思えない自分がいた。わたしの心のなかには、まるで灰色の色素を持った冷たい水が沈殿しているような、そんなどこか孤独感にも似た、満たされない想いがあって、それはどうしようもなかった。たとえばそれが傲慢で、贅沢な思いだとはわかっていても。

「お先に失礼します」

高島さんは無表情に小声でそう告げると、ドアを開けて、事務所の外へと歩いていった。

「お疲れさま」

わたしは彼女の姿が見えなくなると、ほっとしたような、けれども、どこか傷ついたような惨め気持ちになった。

わたしは軽いため息をついてから、仕事の続きに取り掛かった。

高島さんはわたしが勤めている保険会社のふたつ後輩だ。彼女はわたしのことが嫌いなのか、それともただ単にもともとそういう娘なのか、わたしが話しかけても、いつもまともな返事を返してくれない。

彼女がわたしの言葉に返す単語はいつも簡潔で愛想がない。はいといいえとそうですねの三点セット。わたしがただの一度でも彼女に辛くあたった試しがあるだろうか？ たぶん、そんなことはないはずだ。少なくともわたしの思い出せる限りは。

わたしは彼女が仕事でミスをしてでも激しく叱責したことはないし、いつもできるだけ優しく接しているつもりだ。それなのに、どうして、と、思ってしまう。彼女はわたしの一体何が不満なのだろうと心が暗くなる。

わたしはべつに彼女とプライベートで親しくしたいと思っているわけではない。ただ一緒に仕事をしているときに気持ちよく働きた

いと思っているだけだ。それなのに。

わたしもいちいち気にしなければいいのだろうけれど・・・ただの仕事上の関係なのだとわりきってしまえばいいのだろうけれど、でも、小心者のわたしはどうしてもそうすることができない。話しかけて彼女がよそよそしい返事を返すたびに、わたしはバカみたい、いつも、傷ついてしまう。

いっそ、彼女と一緒に仕事をしなすめばいいのと思う。彼女以外のひとはみんないいひとで、話しやすいひとたちばかりだから。でも、そういうわけにもいかない。わたしは高島さんの教育係りを任されていて、だから、どうしても彼女と接する時間は長くなってしまう。

そもそも、この保険の仕事に上手く馴染むことができない自分がある。入社した当初は何度もやめようかと思った。

わたしの仕事の主な内容は、簡単に言ってしまうえばクレーム処理で、だから、暴言や理不尽な言葉をお客に浴びせかけられることは日常茶飯事だ。そのぶん給料は悪くはないけれど、かなりストレスが溜まる。まともな精神状態ではいられない。

それでもこれまでどうかこの仕事を続けてこられたのは、比較的人間関係が良好だったからだ。お客に辛いことを言われても、先輩や同僚が優しい言葉や冗談で慰めてくれた。でも、いまは・・・。いっそのこと、この仕事を辞めてしまおうか。でも、もしやめたとして、そのあとどうするのだろう。わからないな、と、わたし思う。

兄の姿を見ているから、もし会社を辞めたとして、ちゃんと再就職することができたらどうかと不安になってしまいうし、そもそもわたしにはこれといってはっきりとやりたいと思うようなことがない。

心の底から、何か暗い色素を含んだ冷たい液体が噴出してきて、わたしの心のなかを出口をもとめてぐねぐねと這い回るような不快な感触があった。

ふと事務所の時計に目を向けると、もう時刻は午後の八時半を回っていた。

仕事が思うようにはかどらなくてイライラする。イライラするというよりは、焦燥感が募る。早く帰りたいのに。いま、この事務所に残って仕事をしているのはわたしだけだ。他のみんなはさっさと仕事を終えて帰宅してしまった。

だいたいにおいて、いまわたしがしてるこの仕事は高島さんが今日やり残したぶんじゃないか。なんでわたしが、と、哀しみの混じった憤りがこみ上げてくる。

わたしはパソコンのキーボードを叩く手を休めると、軽く瞳を閉じた。心が不安定に揺れた。惨めな気持ちになって、泣き出しそうになった。それが大袈裟な感情だということはわかっていたけれど、でも、どうしようもなかった。わたしはきつく瞼を閉じて、瞼の隙間からどうにか自分の感情が溢れ出してしまうのを押しとどめた。

閉じていた瞼を開くと、そこには窓の外の、夜の闇に黒く塗りつ

ぶされた世界が見えた。

仕事を終えて帰宅すると、時刻はもう十一時近かった。

玄関で靴を脱ぎ、わたしがとりあえず自分の部屋に荷物を置きに行こうと家の廊下を歩いていると、トイレにでも行くところだったのか、自分の部屋から出てきた兄とばったり鉢合わせした。

わたしは兄に向かってただいまと言ったけれど、兄はそんなわたしの言葉を無視して、無言で廊下を歩いていってしまった。わたしは自分から遠ざかっていく兄の後ろ姿を少しのあいだ黙って見送った。

自分の部屋に入ると、わたしは何も考えずにそのままベッドのうえに仰向けに倒れこんだ。ベッドのうえに横になったとたん、肉体的な疲労感がどっと押し寄せてきた。それと一緒に、自分でも上手く言い表すことのできない心の疲れのようなものも。ふたつの疲労感はわたしのなかで重なり合って、一瞬、いま見えている視界が何かの強い圧力で押しつぶされでもするようにぐにやりと変形した。そしてそれはすぐにまたもとに戻った。

これからどうしようとわたしはベッドのうえに仰向けに横になったままぼんやりと考えた。一階におりていってご飯でも食べようか。それよりもまずさきにお風呂に入ろうか。わたしがそんなことを考えていると、唐突に、ケータイの着信音が鳴った。



起き上がるのが億劫なので仰向けに横になったまま、側においてあった鞆のなかからケータイを取り出して電話に出る。

電話に出ると、耳元に響いた声は、隆俊の声だった。わたしと隆俊は遠距離なので、一応一日一回は電話で会話をするようにしている。

「もしもし」

「お疲れ」

「お疲れ」

「いまなにしてるの？」

隆俊はわたしの気分とは対照的に明るい声で尋ねてきた。

「いま？いま会社から帰ってきたところ。それで疲れて部屋でぼうつとしてるかな」

わたしは苦笑して答えた。

つられるようにして隆俊も少し笑うと、

「いま帰ってきたところなの？遅くねえ？飲み会でもあったの？」と、隆俊は怪訝そうな声で訊いてきた。

部屋の時計に目をやると、今時刻は十一時二十分を少し過ぎたところで、確かに遅いかもしれないなとわたしは思った。

「ううん。今日は残業だったの。色々やらなきゃいけないことがあって」

「そっか。大変だな」

「隆俊は？」

「俺？俺も今帰ってきたところ。今日は早く仕事終わったんだけどさ、帰りに、係長に飲みに誘われてさあ。それでまあ、断れねえし」  
「そっか。そっちも大変だね」

わたしは曖昧に微笑して感想を述べた。

「ほんとだよ。係長って仕事の話しかないし、全然気が休まらねえよ。仕事終わったのに仕事してるみたいな感じでさあ。まあ、係長のおごりだからべつにいいんだけど」

「そっか」

わたしは隆俊の話になんて答えたらいいのかわからなかったのですが、ただ相槌だけを打った。

少しの沈黙があった。

「なんか今日良美元気ないよな？」

何秒間の沈黙のあと、隆俊は心配そうな声で言った。

「そう？べつにそんなことないど。たぶん疲れてるだけ」

わたしは笑って答えた。仕事先の人間関係で悩んでいるなんてかっこ悪くて告げる気にならなかった。まだ誰かに相談しなければならぬほど深刻なわけじゃない。たぶん。

「なら、べつにいいんだけどさ」

隆俊は軽く微笑して、比較的あっさりとした言葉に納得した。

また少しの沈黙があった。いつもならもっと会話は弾むのだけれど、今日は肉体的にも精神的にも疲れていて、何も言葉が浮かんでこなかった。それでもわたしがどうにか会話を繋ごうと頭のなかで話題を探していると、

「来週の水曜日さ」

と、また隆俊が話しはじめた。

「急な出張でそっちに行くことになったんだよ」

「へー。そうなんだ」

「そうなんだって、それだけ？」

「それだけって？」

わたしが隆俊の言葉の意図がわからずに聞き返すと、隆俊は、

「だって、出張でそっちに行くってことは、良美に会えるってことじゃん。もうちょっと嬉しそうなリアクシヨクしてくれても良さそうな気がするんだけどな。なに？俺がそっちに行くのって迷惑？」

隆俊はおどけた口調でそう言うと、少し笑った。

「ううん。迷惑じゃないって。全然嬉しい」

わたしはつられて笑いながらそう言った。そして言いながらわたしはまた失敗したなと思った。このところわたしは無意識のうちに隆俊の機嫌を損なうようなことばかりを口にしてている。

「ほんとに思ってたんのかよ」

隆俊は笑って答えると、また詳しい予定がわかったら電話すると言って電話を切った。

わたしは隆俊の声が聞こえなくなったケータイを耳元から離すと、真っ暗になったディスプレイに少しのあいだ視線を注いだ。そしてそのケータイをうつぶせにベッドのうえに置いた。それからしばらくのあいだわたしはベッドのうえに仰向けに横たわったままだった。

じっと天上を眺めていると、いつからそこにあったのか、天井の隅の方に、蝶々のような形をした黒い染みがあるのをわたしは見つけた。

待ち合わせ場所のセルフサービスのカフェに入って、アイスのカフェラテを買い、適当に空いている席を見つけて腰を下ろす。すると、ほぼ同時に、ケータイの着信音が鳴った。

鞆のなかからケータイの取り出してみると、由香子からメールが届いていた。なんでもいま電車が遅れていて、待ち合わせの時間よりも少し遅れるらしい。わたしは了解のあとに笑顔の絵文字を付け足して由香子にメールを返した。

中央線はなんだかいつも電車が遅れているイメージがある。由香子は少し遅れるとメールしてきていたけれど、でも、一体どれくらい遅れるのだろう。少なくとも三十分は遅れそうだな。でも、まあ、電車が遅れているのなら仕方がない。べつに彼女が悪いわけじゃないのだから。

こうして由香子に会うのは久しぶりのことだった。この前わたしが彼女に電話したときに、今度の土曜日に久しぶり会おうという話になったのだ。確か彼女に最後に会ったのは夏だから、もうかれこれ三ヶ月近くが経っているということになる。

由香子とわたしが知り合ったのは、わたしが大学のあるときにしていたアルバイト先だ。彼女とは何故か馬が合って、アルバイトを辞めてからも、こうして定期的に会っている。彼女はアパレル関係の会社に勤めていて、わたしなんかよりも遥かに忙しそうだ。

彼女の話だと、十日に一日休みがあるかどうかという感じらしい。

かなり過酷な状況だけれど、でも、彼女はそんな忙しい毎日を楽しんでいるように見える。たぶん、自分の好きなことを仕事にしているからだろう。

わたしの場合は彼女とは正反対で土日祝日は必ず休みがもらえるけれど、じゃあそのぶん、毎日が充実しているかというと、そんなことはなくて、なんだかなあという気分になる。

休みの日は、隆俊と会う日以外は暇で時間を持て余していることが多いかもしれない。丸一日家に居るのは嫌なので、何も予定がない日でも、一応家から出て買い物に出かけたり、友達と食事に行ったりするのだけれど、でも、どうしても消化不良感じは拭えなくて、何が足りないのだろうといつもややもやする。そしてそんなややもやした気持ちを抱えたまま、また嫌々仕事にいくことになる。上手く形容することのできない閉塞感が、わたしの日常生活のそこそこにはあった。

アイスのカフェラテをストローで少し口に含むと、由香子が来るまで特にすることもないのでどうしようかと悩んだ。ちょっと考えたあとでふと鞆のなかに小説が入っていることを思い出した。わたしは早速鞆のなから小説を取り出して広げた。

その小説はわたしが買ったものではなくて、拾ったものだった。昨日仕事の帰りに電車のシートに座ったときに、わたしの座席の側に落ちていたのだ。

となりには誰も座っていなかったら、きっと誰かが置き忘れていたのだろう。もしくは読み終わったから捨てていったのか。いずれにしても、わたしはなんとなくその本のが気になったので、側にあった本を手にとって数行読んでみた。すると、普段あまり小説

を読んだりすることのないわたしでもずっとその小説の世界のなかにはいつていくことができた。どうせ駅員に届けても持ち主が取りに来るはないだろうと思ったので、物語の続きが気になったわたしはその本を持って帰ることにした。

昨日読んだのは、主人公の女の人が、待ち合わせ場所の喫茶店に入ったところまでだ。なんだか今のわたしの状況と同じだなと思うと、少し可笑しかった。

主人公の女の人は三十代後半で、結婚していて、まだ幼い息子がひとりいる。息子は小学校に通い始めたところで、やっと手がかからなくなってきたところだ。夫は仕事一筋のひとであり家に帰って来ない。彼女は専業主婦だ。夫の稼ぎは悪くはないから、ある程度自由にお金を使うことができる。子供もあまり手がかからなくなったいまは、家のことさえしっかりやっておけば、時間も自由に使える。不満らしい不満のない毎日だ。

けれども、彼女は自分でも上手く言いあわすことのできない孤独感を抱えて毎日を過ごしている。そんなふうに感情が不安定になっってしまうのは、夫が以前ほど彼女に対して愛情を示してくれなくなっただけでもあるかもしれない。

そんなとき、彼女は街で音大（彼女は大学でピアノを専攻していた）のときの同級生とばったり再会する。話したところによると、彼はいま売れないピアニストをしているらしかった。

昔話で意気投合したふたりはそれ以来ときどき会うようになる。そしてそのうちに彼に一度家にピアノを聴きに来ないかと誘われて彼の自宅に行った彼女は、夫に悪いとは思いつつも（実を言うと、彼女は大学生のとき密かに彼に憧れていた）彼と身体の関係を持つ

てしまう。

その日、彼女はその喫茶店でピアノリストの彼と落ち合うことになっていた。彼女は注文を取りに来たウェ이터にコーヒーを注文し、その注文したコーヒーが運ばれてくるまでのあいだ、店の壁にかかった絵画にぼんやりと視線を彷徨わせる。それは『枯れかけの花』というタイトルの絵で、文字通り、花瓶に生けられた、枯れかけの花を描いた静物画だった。

絵を見ているうちに、この絵のことを昔どこかで観たことがあるな、と、彼女は観たとのないはずの絵なのに、既視感に捕らわれる。どこことなく懐かしい感じがする。何故懐かしいと感じるのだろうか。彼女はしばらくのあいだ考えているうちに、やがて思い出す。その絵のタッチや、雰囲気、昔観た弟の絵に似ていることに。

彼女は弟とはもう長いあいだ会っていないなかった。彼女の弟は彼女が大学を卒業して少しした頃くらいに父親と大喧嘩をして家を飛び出していったきりだった。

彼女の父親は会社を経営していて、彼女の父親はひとり息子である彼女の弟に当然自分の会社を継いでもらうつもりでいた。でも、弟にはそんなつもりは全くなかった。彼女の弟は幼い頃から絵を描くのが好きで、将来は絵描きになるつもりでいた。

だから、当然、彼女の弟と父親の考えは平行線を辿ることになった。彼女の父親は彼女の弟に向かって、絵で成功などできははずがな言い、弟はそんなことはやってみなければわからないと言いつ返した。あとは非難の応酬になり、ついに彼女の弟は家を飛び出してしまった。最後に彼女が弟と話したときには彼はどこか外国に行くと言っていたけれど、今、彼がどこでどうしているのか、彼

女は全く知らなかった。



「お待たせ」

わたしがそこまで読み進めたところで声がした。

ふと顔を上げてみると、いつからそこに居たのか、目の前には由香子がプラスチックの容器に入ったアイスコーヒーを持って笑顔で立っていた。

わたしは彼女の姿を認めると、読んでいた本を閉じて鞆のなかにしまった。由香子はわたしと向かい合わせの席に腰を下ろすと、遅れてごめん、と、謝った。わたしは微笑んで首を振った。

「電車が遅れたんなら仕方ないよ」

「なに読んでたの？」

由香子はアイスコーヒーにガムシロップとミルクを入れてストロ―で軽やかき混ぜると、ふと思いついたように尋ねてきた。

「ちよっと小説を読んでいたの」

と、わたしは答えた。

「誰の小説？」

と、由香子はわたしの返事に興味を惹かれた様子で尋ねてきた。由香子は本を読むのが好きで、わたしの知らない、昔の、難しそうな小説もよく読んでいた。

わたしがさっきまで読んでいた本のタイトルと作家の名前を告げると、由香子は聞いたことがないと首を傾げた。

「どんな話？」

と、由香子は続けて尋ねてきた。

「うーん。どんな話だろう」

わたしは苦笑して答えた。

「とりあえず暗い話かな。まだ最後まで読んでないからわからないけど」

「そっか」

と、由香子は納得したように頷くと、ストローでアイスコーヒーを一口啜った。そして社交辞令のようにまた読み終わったら貸してよと笑顔で言った。わたしはもちろんいいよと微笑して答えた。

それからわたしたちはなんでもない世間話をした。天気の話や、最近観た映画の感想、今話題になっている芸能人の話。共通の知人のだれそれが今どこでなにをしているといった話。

「だけど、社会人になってからほんと時間なくなったよね」

と、一通り話題が尽きたところで、由香子が苦笑するように微笑して言った。

「由香子は仕事忙しそうだもんね」

と、わたしが相槌を打つと、由香子は、

「それもあるけど・・・なんだか大人になるって大変だなあって最近思ってる」

由香子はわたしの言葉に笑ってため息まじりに言った。

「なにかあったの？」

と、わたしが微笑んでからかうように尋ねると、由香子は微笑笑して軽く首を振った。そして、由香子は、

「ただなんとなく」

と、続けた。

「子供のときってさ、今みたいに色々面倒臭いことって考えなくて良かったじゃん？仕事のこととか、将来のこととか、色々・・・。

もちろん、大人になって良かったって思うこともあるけど。たとえばいまは自分の好きなようにお金使えるし、どこにでも行けるし・  
・

でも、なんか最近たまになんだか大変だなんて思うときが多くて。何が大変なのかって訊かれると、自分でも上手く説明できないんだけどね」

由香子はそのままで言葉が続けると、思い出したようにストローでアイスコーヒーを飲んだ。わたしもつられるようにもう残り僅かになったアイスのカフェラテを飲んだ。

「でも、確かにそういう部分ってあるかもね」

と、わたしは少し間隔をあけてから由香子に共感して言った。

由香子はアイスコーヒーのうえに落としていた眼差しをあげて、わたしの顔を見た。

「歳をとればとれるほど、だんだん人生が複雑になっていく気がする」

「たとえば？」

「たとえば？」

わたしは由香子の振り苦笑して考えた。

「そう訊かれると困っちゃうけど、でも、そうだな、子供のときはもっと色々な物事がシンプルだった気がする。上手く言えないけど、遊びなら、遊びで、その瞬間を全力で楽しめてた気がする。」

でも、いまは昔みたいにいまっていう瞬間を楽しめなくなった気がする。

たとえばわたしはこうして由香子と一緒に油茶してるけど、でも、頭のどこかで明日の仕事のことを考えてる自分がいるし・・・それに他にも、たとえば好きなひとと一緒に時間を過ごしてたとして、昔はただ純粹にそのひとのことが好きだっていうだけで良かったのに、いまはついつい結婚とか、結婚じゃなくても、これから先のこととかを気にしちゃう自分がいる。

恋愛に変な計算みたいなものが入り込んできて、自分でも嫌だなんて思う」

「そっか」

由香子はわたしの言葉に相槌を打つと、数秒間何かに思いを巡らせている様子でいたけれど、やがて、

「でも、確かにそういうことってあるかもね」

と、何か考え込むような顔つきで頷いた。

わたしが黙っていると、

「わたし、大学のおかげから付き合ってる彼氏がいるけど」

と、由香子は話はじめた。

「わたしの彼氏、今バンドやってるんだけど、だから、全然就職する気となくて。好きなことをやるのはいいことだと思うけど、でも、いまのままじゃ結婚とかは無理だなんて思ってる。」

不安定だし、収入的な問題もあるし。でも、そういうふうに見えるだすと、わたしは彼と利害の関係でつきあってるみたいで、嫌になる。昔はもっとシンプルに、彼のことが好きだっていう気持ちだけでいられたのに」

「でも、まあ、結婚するとなると、どうしても経済的な問題は気になっちゃうよね」

と、私はなぐさめるでもなく微笑して言った。

「そうなんだけどね」

と、由香子はわたしの言葉に浮かない表情で頷くと、アイスコーヒーを飲んだ。それから、苦いというように少し顔をしかめた。

「でも、まあ、それはともかくとして。良美の言ってることはよくわかる気がする」

と、由香子はテーブルに頬杖をつくと、憂鬱そうな表情で言った。

「大人になると、色々面倒臭い現実の問題が増えてくるよね。結婚とかもそうだけど、他にも色々。会社での人間関係とか、付き合いとか、将来のこととか・・・ほんとに箱をあけてもあけてもまだまだ次の箱があるみたいな感じ」

わたしはそう言ったときの由香子のブスとした表情が可笑しくて、思わず小さく噴出してしまったけれど、

「でも、そうかもね。昔みたいに純粹に自分の気持ちだけじゃ行動できなくなってきたかも。好むと好まざるとかかわらず、色々さきのことを考えて、これはこうだからこうしておかなくちゃって、計算ばかりしてる気がする」

と、わたしは改めて由香子に共感して言った。

「だけど、結局、それが大人になるっていうことなのかも」  
わたしは少ししてから半ば自分に言い聞かせるように付け足して言った。

由香子はそう言ったわたしの科白にしばらくのあいだ黙って何か考え込んでいる様子でいたけれど、やがて、

「大人になるかあ」

と、小さな声でポツリと言った。

「でも、それだと、大人なるって、ちよつとずつ不幸になっていくことのような気がするね」

と、由香子は続けて言った。

「ちよつとずつ身動きが取れなくなって、最後にはその場所から一歩も動けなくなるみたいな感じ」

わたしは由香子が口にした科白にどう答えたらいいのかわからなかったので黙っていた。

「もし、それが大人なるっていうことだとしたら、寂しいね」  
と、由香子はわたしが黙っていると、呟くような声で言った。

由香子が喫茶店で口にした言葉はもちろん極端な意見だとしても、大人になるということは、確かに、少し、寂しいことなのかもしれないな、と感じる。少なくとも、それほど愉快なことではないな、と思う。

社会にでて、現実を知ること、そこにもここにも壁があるということを知ってしまう。かつてわたしたちは自分の努力次第でどこへだって行けると信じていた。でも、それが自分たちの無邪気な妄想に過ぎなかったことに、歳とともに嫌でも気がつかされる。多くの場合努力は報われないし、わたしたちはそれほど遠くへはいけない。

かつてまだ幼かった頃、大人になった自分にはもっと華やかな将来が持ちうけているはずだと信じていた。具体的にこうなりたいというような目標はなかったけれど、でも、それはアイドル歌手がスポットライトを浴びて輝いているような、キラキラと眩しい何かだった。

でも、大人になったわたしの身の回りにある現実、目を覆いたくなるような悲惨なものでこそないものの、かつて信じていた鮮やかな未来にくらべれば、ずいぶん色あせた、地味なものでしかない。

そして、今のこの現実を維持することすら、結構大変だったりする。色んなことを我慢して、目を瞑って、犠牲して、それでやっとどうにかこうにか、自分だけの小さな世界を維持できているという

感じた。ちょっと気を抜けば、わたしが維持しているこの小さな世界なんて、あっという間に吹き飛んでしまいそうな気がする。

7

このところ精神的に不安定になっているのか、よく同じ夢を見る。それはわたしが高校のときに好きだった男のひとがでてくる夢だ。

わたしには高校のときに好きなひとがいた。そのひとは高校のときにいつも一緒に遊んでいたグループの、ひとつ年上の先輩だった。わたしはその先輩のことが好きだった。とても。

でも、臆病なわたしは自分の気持ちを伝えることができなかった。ずっと片思いのままだった。何度か告白しようと思ったこともあるのだけれど、でも、どうしても行動に移すことができなかった。

そしてそのうちに先輩には彼女ができた。その彼女というのはわたしの友達だった。その友達は女のわたしからみてもとても綺麗な娘だった。友達から聞いた話によると、先輩の方からその娘に告白したらしい。

先輩に彼女ができたという話を聞いたとき、もし、わたしが友達みたいに綺麗だったら、先輩もわたしのことを好きになってくれたのかな、と、心が冷たい水に濡れていくように孤独な気持ちになったことを覚えている。

夢で見るのは、わたしが先輩に自分の気持ちを伝える（現実にはそんな機会はなかったのだけれど）場面だ。設定はそのときどきに



よって違うのだけれど、結末はいつも同じだ。わたしが先輩に振られるのだ。わたしがどんなに想っても、願っても、わたしの気持ちは届かない。決して。そういう夢。

その夢を見るたびに、わたしはあれからもう何年も経っていると  
いうのに、まるで先輩に憧れていたその当時のように、深い湖の底  
に沈んでいくような喪失感と伴に目覚めることになる。

自分の部屋でネットを見ていると、また下の階で父親と兄が言い争う声が聞こえてきた。

ふたりが言い争う声を聞きながら、ふとわたしが思い出したのは、今日テレビで観た殺人事件のことだった。

三十六歳の無職の男性が父親をバットで殴り殺したという話。なんでもその三十六歳の男のひとは、就職しろとうるさい父親のことが憎かったらしい。そのうちに兄も勢い余って、ニュースのなかの男のひとと同じことをしてしまうんじゃないかと恐ろしくなる。まさかとかは思うけれど、でも、もしかしたら。

とにかく、父親と兄の口論を聞いていると、なんだかこっちまで暗い気持ちになってくる。息のつまるような、ひりひりとした、緊張感があって、家にいても気が休まらない。改めて、早く家を出ようとうとわたしは思う。

いまわたしがネットで見ているのは、不動産会社のホームページだ。賃貸の情報がずらりと並んでいる。物件は数あるものの、家賃がある程度安くて、なおかつ交通の便が良くて、駅が近いところになると、どうしても選択肢は限られてくる。

ほんとうはドラマのなかで主人公が住んでいるようなオシャレで広い部屋に住みたいのだけれど。でも、わたしのいまの給料ではとても無理だ。いや、かなり無理をすれば住めなくはないのかもしれない。

ないけれど、でも、住む場所に月々十万以上かけるのはどう考えてももったいない。

いまざっとネットを見ていてわたしがいいなあと感じた物件は、中野にある1kの物件だった。部屋も8・5畳とわりと広めで、お風呂とトイレもセパレートになっている。オートロックだし、女のわたしでもこれなら安心だ。駅から徒歩五分で、家賃は八万四千円。ちょっと予算オーバーだけれど、でも、立地条件を考えると、これくらいは仕方がないのかもしれない。

今週の休みにでも観に行ってもようかなとわたしは思った。はじめての一人暮らしを想像すると、それまで沈みがちだった気持ちが一瞬だけ華やいだ。一人暮らしをはじめれば、隆俊もこれからは自由遊びに来られるようになるだろう。

そういえば、今週は隆俊が東京に来るのだ。隆俊にわたしが一人暮らしをすることを話したら、彼はどんな反応をするだろうか。早く隆俊に会いたいと、今週の週末が待ち遠しくなった。

## 8

「だから、ちょっと待ってって言ったじゃん！」

気がついたとき、わたしはつい声を荒げてしまっていた。

「なんで勝手にはじめるの？」

会社の後輩の高島さんが、わたしが他の作業を終えて戻ってくるまでではじめないでと指示をだしておいた作業を、わたしが戻ってく

るのを待たないで勝手にはじめてしまったのだ。

わたしの注意に、高島さんは特に謝るでもなく、困ったような表情を浮かべてただ「ああ」と曖昧な返事をしただけだった。そのリアクションに、またわたしは苛立しい気持ちになる。なんですいませんの一言も言えないのだろう。

だけど、わたしもわたしで大人気ないかもしれないな、と、一方で思ったりする。わたしもいつもならこれくらいのことです声を荒げたりはしないのだけれど。でも、今回は自分を抑えることができなかった。

わたしがどれだけフレンドリーに接しようとしても、彼女がそれに応えてくれないことに対して、自分でも知らないうちにかなりフラストレーションが溜まってしまっていたみたいだった。わたしが一体彼女に何をしたというだろう？なぜそんなによそよそしい受け答えしかできないのだろう。そんな普段の気持ちの積み重ねが、わたしをつい強い口調にさせた。

しばらくの沈黙のあと、わたしは軽くため息をついてから、何故ひとりで作業をはじめてはいけなかったのかを彼女に説明した。わたしの説明に彼女は不満そうにただはいと頷いただけだった。

それから気まずい時間が続いた。わたしも高島さんに話しかけなかったし、高島さんも話しかけてこなかった。

勤務時間が終わったあと、さっきはちょっと言い過ぎたかなと反

省したわたしは、特にどうしても知りたいわけではなかったのだけれど、今日はこのあとは真っ直ぐ家に帰るの？と高島さんに話しかけてみた。

わたしは高島さんと和解したかったのだ。少し彼女と会話を交わすことで、さっきわたしが叱責したことのできた気まずい関係を改善したかった。このあとも一緒に働くことになるのだから、お互いに気詰まりな思いを抱えたままでは避けたかった。

でも、高島さんから帰ってきた返事は「はい」の一言だけだった。そのあとすぐに高島さんは「お疲れさまです」と無表情に言って、更衣室に行ってしまった。わたしの彼女への気遣いや、配慮はまったく彼女には届かなかったようだった。

わたしは更衣室に向かって歩いていく高島さんの後姿をぼんやりと見送った。高島さんの姿が見えなくなると、わたしは何かを押し込めるように強く瞼を閉じた。高島さんに対する強い感情がこみ上げてきた。それは怒りというよりは、哀しみに近い感情だった。

自分の好意があっけなく踏みにじられてしまったような、傷ついた、寂しい気持が、痛みを伴って心にじんわりと広がっていった。そしてそれはいつまでも消えなかった。どんなときもそれはそこに在って、じわじわとわたしの心を内側から傷つけていった。

隆俊から電話があつて、週末会う約束をキャンセルされたのは、金曜の夜だった。なんでも急な仕事の予定が入って、東京に出張してきたあと、すぐに名古屋に帰らなくてはならなかったらしい。仕事だから仕方がないのだけれど、でも、隆俊と会うことを楽しみにしていたわたしにとって、それは残酷な裏切りのように感じられた。

隆俊は今度埋め合わせに何か買ってやるよと言っていたけれど、わたしはそんなものよりも、どうかにしてわたしと会う時間を、たとえ一時間でもいいから作れないのだろうかと不満に思った。こんなことを思うのは情けないのかもしれないけれど、高島さんの一件以来、わたしは誰かに慰めてもらいたいと思っていたのだ。無条件に誰かの強い愛情に包まれないかと思っていた。子供が母親の愛情を求めるときのような、渴望があつた。それなのに、どうして、と、隆俊に会えないことが、大袈裟に哀しく感じられた。

でも、いくら隆俊に会えないことを嘆いても仕方がないので、隆俊と会えなくなったことで空いた週末の時間を、わたしはアパート探しに宛てることにした。

三鷹にある実家から電車に乗って、中野まで行き、そこで目に付いた不動産会社に入る。アパートを探しに不動産会社を訪れるのはじめての経験なので、傍目に見たら挙動不審なひとに思われてしまうんじゃないかと心配になるくらい緊張してしまった。

担当の男のひとが条件を提示してくれと言うので、わたしが理想

としているよりもちよつと低いかなというあたりの条件を提示すると、担当の男のひとはすぐに分厚いファイルを開いて、そのなかからいくつかわたしが提示した条件に近い物件を紹介してくれた。

物件はどれも悪くはなかったのだけれど、考えていたよりもちよつと家賃が高いのが気にかかった。できれば家賃は七万円台に押さえたいと思っていたのだ。けれど、提示した条件をクリアする物件はどれも最低八万はした。希望通りの部屋となると、九万円代になってしまう。

わたしが迷っていると、担当のひとがとりあえず観にいくだけでも観に行ってみませんかと誘ってきた。わたしはそうですねと言つて、彼の運転する車に乗って、中野の近辺にあるそのいくつかの物件を観にいくことにした。

わたしの担当になった男のひとは太っていて、メガネをかけていた。彼は車を運転している最中、わたしに氣を使ってくれているのか、しきりに話かけてくれるのだけれど、自分でつまらない冗談を言つて自分で笑うのが少し氣になった。笑い方に癖があるのだ。これはわたしの偏見なのかしれなかったけれど、その低くひきつた笑い声はまるで変質者の笑い声のように、わたしには氣味が悪く感じられた。

それから彼は冬だというのによく汗をかいた。白のワイシャツが汗で濡れてそのしたにある素肌が透けて見えるくらいだった。顔には玉のような汗が浮き、信号で車がとまるたびに、彼はその汗をハンカチで拭った。わたしはそのハンカチを見ているうちに、自分がそのハンカチになって、彼の汗をふき取られるところを想像してしまつて、少し氣分が悪くなった。

彼に連れられていったアパートは、事務所で間取りを見せてもらったときに想像していたものとは大きくイメージが違っていた。ヘイベー数が小さくて八畳と記されてあっても、実際には六畳よりもちよつと広いかなというくらいの広さしかなかったり、あるいは広さがあっても収納がなかったりした。

全部で五つの物件を見せてもらったのだけれど、結局納得できるようなアパートは見つからなかった。

ひとつだけ、他の物件に比べると、まだまともに感じられる物件があったことはあったのだけれど、駅から離れ過ぎていて、決め切れなかった。

わたしが躊躇していると、担当の男のひとはこの物件は人気があるから手付け金を払ってでも押さえておいたほうがいいですよとアドバイスしてくれた。

けれど、わたしはとてもそんな気にはなれなかった。手付け金もしそのアパートに決めなかった場合は返してもらえるということだったけれど、わたしは後日、またこの男のひとに会わなければならぬのかと思うと、ちよつとうんざりした気持ちになった。

気のせいかな、わたしが部屋を見ているあいだ、身体をじろじろと見られている気がして、すごく嫌だったのだ。

再び彼の運転する車に乗って店まで戻り、また考えてから来ますと返事を濁して店を出たときには、もうぐったりと疲れきってしまった。

冬の気の早い太陽はさっさその身体を建物のあいだに隠しはじめ



ていて、その淡い闇が広がりはじめた街のなかで、今日という一日が、わたしを無視して通り過ぎていってしまうような、虚無感にも似た徒労をわたしは感じた。

## 10

その日、家に帰りついたわたしは、特にやりたいことも思いつかなかったので、このところ忙しくて手にとっていなかった小説の続きを読むことにした。

以前読んだのは、主人公の女の人が喫茶店で不倫相手を待っているうちに、ふと、弟のことを思い出すところまでだった。

やがて、彼女のテーブルに注文したコーヒーが運ばれてくる。彼女はそのコーヒーに砂糖をほんの少しだけ加えて、一口口に含む。それから彼女はまた弟のことを考える。

主人公の女の人には弟に対して、ひとつ、ずっと謝りたいと思っていることがあった。それは彼女の弟が家を飛び出していく少し前に、彼女が弟に向かって口にした科白だった。

彼女の弟が、自分の絵について、才能について、どう思かと尋ねたときに、彼女はこう言ってしまったのだ。もう少し現実的なものを考えるべきじゃないのか、と。確かにお父さんの言うように絵で結果を出すことはすごく難しいことだし、とりあえずいまはお父さんの言うことを聞いて、大学に行き、会社をついで、絵は、趣味として続けていけばいいんじゃないのか、と。

でも、それは弟が彼女に対してもとめていた言葉ではなかった。弟は彼女にだけは味方でいてもらいたいと思っていたのだ。姉である彼女だけは自分の味方でいてくれると信じていたのだ。でも、そうとわかっていながら、彼女はそのとき、無難な返事をしてしまった。彼の味方をしてあげなかった。

彼女が弟に向かって返事を返したとき、弟が寂しそうな顔をしてそうだよねと頷いたことが、彼女はずっと忘れられなかった。彼女はずっと謝りたいと思っていた。少なくとも自分は弟の描く絵が好きだと思っていることを、弟にかして伝えたいと思っていた。でも、彼女がいくらそう思っても、彼女は弟が今どこでどうしているのか、全く知らなかった。

彼女が喫茶店の壁に飾られた絵画を見つめながらそんな回想に耽っているとき、そのうちに、彼女の不倫相手である男性がやってくる。彼は、彼女がどこか寂しそうな表情を浮かべているのを目にして、「どうかしたの?」と、怪訝そうに尋ねてくる。彼女は彼の問いに短く首を振って、「なんでもないの」と、短く答える。「ちょっと昔のことを思い出してただけ」

わたしがそこまで物語を読み進めたところで、ケータイの着信音が鳴った。隆俊から電話がかかってきたのかと思ったけれど、ケータイのディスプレイに表所されている名前は隆俊ではなくて、由香子の名前だった。

「わかる?」

由香子はわたしが電話に出ると言った。

「うん、わかるよ。だって着信でてるし」

「そうだよね」

と、由香子は苦笑するように微笑して頷いた。

「どうしたの？」

と、わたしは用件を尋ねてみた。

「由香子が電話してくるなんて珍しいよね？」

そう言ったわたしの言葉に、由香子は、

「うん、まあ、ちょっとね」

と、返事を濁した。

「なにかあったの？」

と、わたしが尋ねてみると、由香子は逡巡するように少し間をあけてから、

「わたし、彼氏と別れるかも」

と、唐突に告げた。

「えっ、どうして？」

と、わたしが驚いて尋ねると、

「さっきちょっと喧嘩しちゃってさあ」

と、由香子は少し無理に明るい口調を装って答えた。

「そうなんだ」

と、わたしは上手いコメントが思いつかなくてただ相槌を打った。

「・・・それで変に気が高ぶっちゃって、誰かと話したくて」

「そういうことってあるよね」

と、わたしは彼女をなぐさめるようにできるだけ優しい声で言った。

いくらかの沈黙があって、家の外の通りを走りすぎていく車の音が遠くに聞こえた。

「ほんとに別れちゃうの？」

と、わたしは由香子が黙ったままだいるので尋ねてみた。わたしの間に、由香子はわからないと答えた。少し弱い声だった。

「何が原因で喧嘩になったの？」

と、わたしは軽く迷ってから尋ねてみた。すると、由香子は躊躇うように僅かに間をあけてから話はじめた。

由香子の話をまとめると、だいたいこういうことになった。

由香子は今日久しぶり恋人とデートにいった。デートに行ったのは良かったのだけれど、今日の恋人は何故か不機嫌そうで、由香子は何か話しかけてもまともな返事を返さなかった。ぶっきらぼうな口調で短く返事を返すだけだった。

そのうちに由香子もだんだん不愉快な気持ちになってきた。デートのときにどうしてそんな詰まらなさそうな表情しかできないのか、と、彼女のなかで不満が募っていった。

帰り際に、ふたりはレストランに入って食事をしたのだけれど、そのとき、些細なことが切っ掛けで口論になってしまった。由香子の恋人がすぐ近くの席に座ったサラリーマン風の男性をけなすようなことを言って、その科白が気に食わなかった由香子は、つい、恋人に食って掛かるような言葉を口にしてしまったのだ。

そのとき、由香子の彼氏はサラリーマン風の男のひとを見て、サラリーマンなんかやって一体何が楽しいのだろうというような言葉を口にした。彼の口調にはどこか真面目に働くことを見下しているような響きがあった。

だから、由香子はその彼氏の言葉を軽く受け流すことができなかった。

った。真面目に働くことを否定されたことは、まるでいまの自分を否定されたような気持ちに、由香子はなった。それだけでなくても由香子はその日、彼氏に対する苛立ちがかなり溜まっていた。

気がついたとき、由香子は彼氏に対して、あんたにサラリーマンのなにがわかるの？と口にしてしまっていた。

由香子の彼氏は、由香子から予想外の言葉が返ってきたことに少し驚いた様子だったけれど、やがてなんだよそれ？と由香子の言葉の意図を確かめるように強張った声で言った。

「べつに」

と、由香子は紙ナプキンで口元を拭いながら答えた。

「ただサラリーマンなんかやったことのないあんたにサラリーマンの何がわかるんだろうと思って」

由香子の口調は無意識のうちに冷ややかな響きを帯びてしまっていた。

「どういう意味だよ。それ？」

彼氏が苛立った口調で訊いてくる。

「べつに。そのままの意味だけど。サラリーマンやったことのないあんたにサラリーマンやってるひとたちのことを悪く言う資格なんてあるのかなって思って」

もうこれくらいでやめておくべきだと思ったけれど、そのとき、由香子は自分でも自分の感情がコントロールできなくなっていた。

「あんたっていつまでバンドなんてやってるつもりなの？もう大学卒業してから四年だよ？どうすんの？これから？ほんとに音楽でプロになんかなれると思ってんの？そろそろ現実を観た方がいいんじゃない」

やいなのか？」

由香子は自分でも知らないうちに、恋人に対して、必要以上に悪意のこもった質問をしてしまっていた。

「なんだよ。お前。俺に説教するつもりかよ？」

彼氏が怒りで顔を赤く染めながら脅すような口調で言う。でも、由香子は構わずに、

「べつに。ただ質問してるだけ」

と、挑発するように言った。

由香子のなかで暗い色素を持った何かが膨張していくような感覚があった。

「お前に、俺の何がわかんだよ！」

由香子の科白に、彼氏は激昂して怒鳴った。

「何様のつもりだよ。お前」

彼氏の怒鳴り声に驚いた周囲の客が、どうしたのだろうと由香子たちに注目してくる。由香子は恋人の質問に対して、じゃああんたはわたしのなにがわかるのと言いつ返した。あとは罵り合いになった。最後、感情の高ぶった由香子はグラスに入った水を恋人の顔にぶちまけて、店を飛び出してきた。そのあと店に残った恋人がどうしたのか、由香子は全く何も知らなかった。

「さすがに今回はちょっと自分でも言い過ぎたなって思う」

由香子は話し終えると、小さな声で言った。

わたしは由香子の科白にどう答えるべきか少し迷ったけれど、

「そうだね。それはちよつといくらなんでもキツイかもね」

と、正直な感想を述べた。

「だって、由香子の彼氏は音楽をやりたいと思ってるんでしょ？それをあからさまに否定されたら、やっぱりいい気持ちはしないかもね」

「・・・そうだね」

と、由香子は気落ちした声で頷いた。

しばらくの沈黙があって、その沈黙のなかに雨が家の屋根を叩く音が聞こえた。いつの間にか雨が降り出したようだった。そういえばさっきテレビで観た天気予報で今日の夜から雨が降り出すと言っていたことをわたしはふと思い出した。

「とりあえず、由香子はどうしたいと思ってるの？」

わたしは言った。

「どうしたいって？」

由香子はわたしの質問の意味がわからなかったようで、不思議そうに言った。

「由香子はこれから彼氏とどうしたいと思ってるのかと思って。別れてもいいと思ってるのか、それともまだこれからも付き合っていたいと思ってるのか」

わたしの問に考え込むように、少しの間があった。そしてやがて由香子はまだ別れたくはないと答えた。今日は一時的に感情的なってあんなことを口にしてしまったけれど、彼氏とは長い付き合いだし、まだ別れたくはないと思っていると由香子は告げた。

「じゃあ、それなら、まず謝った方がいいかもね」  
と、わたしはアドバイスした。



「今回の場合、由香子だけが悪いわけじゃないと思うけど、でも、由香子にあんなことを言われちゃったら、彼氏としてはとても由香子に頭をさげる気にはなれだろうし。だから、もし、由香子がまだ別れたくないって思ってるんだったら、謝った方がいいかも」

わたしのアドハイスに、由香子は、そうだね、と、少し悲しそうな声で頷いた。

「たぶん、大丈夫だよ」

わたしは由香子を元気づけようとして明るい口調で言った。

「由香子が謝ればすぐに彼氏も機嫌直すって。たぶん」

わたしの言葉に、由香子は、ありがとう、と、微笑して答えた。ほんとうにそうなるといいけど。

受話器に押し付けた反短側の耳に、雨が、世界を濡らしていく音が静かに聞こえた。

日曜日の夜から降り始めた雨はそれから何日か降り続いた。激しく降る雨ではなく、淡々と静かに降る雨だった。雨の色素を含んで世界は何かも少し黒色の色素を帯びた濃い青色に染まって見えた。そしてそんな冷たく沈んだ世界の色調は、知らぬ間に心のなかにも浸透してきて、必要以上にわたしの気持ちを重くさせた。まるで雨の水を含んで重くなった布か何かのように。

会社での高島さんのわたしに対する態度は相変わらずだった。というより、この前の一件以来、より一層高島さんのわたしに対する態度はよそよそしくなったように感じられた。最初のうちはわたしも何とか高島さんとの関係を改善しようと、積極的に話しかけていたのだけれど、そのうちにわたしも諦めた。仕事のこと以外は何も話さなくなった。

でも、それで気分が楽になったかというとなんかそうではなくて、高島さんに対する半ば怒りの混じった、傷ついた、不愉快な気持ちには余計に募っていくばかりだった。一度高島さんに一体わたしの何が不満なのか問いただしてみようかとも思ったけれど、思い直してやめた。きっと彼女はわたしの間にべつにと答えるだけだろうと思った。

その週、窓から見える空間は、いつも、空の色素がそのまま溶け出したような、淀んだ灰色の色素に染まって見えた。

13

隆俊とちよつとした口論になったのは、その週の金曜の夜だった。その日の夜もわたしたちはいつも通り、夜、電話で話をした。最初のうちは楽しく会話をしていたのだけれど、来月の予定の話をはじめたあたりから、空気がおかしくなった。

来月はわたしたちが付き合いはじめてから三年目になる記念日がある日だった。その日は隆俊も休みが取れるということだったので、一緒にどこかに行こうという話になっていた。それにもかかわらず、隆俊が急遽、その日、会えなくなりそうだと告げたのだ。

「えっ、どういうこと、それ？」

わたしは訊き返した。自分でも自分の口調が強張った響き方をするのがわかった。

「だから、その日、予定が入りそうなんだよ。仕事の関係でさ、断れないんだよ。マジで悪いと思ってるよ。ほんとにごめん」

「なにそれ・・・」

わたしは不満だった。納得できなかった。それでなくても先週、会う予定を一方的に反故にされているのだ。

「ほんとにごめんって」

わたしが黙っていると、隆俊が焦った口調で言った。

「だって、先週だって会う予定だったのに、会えなかったんだよ」  
わたしは抗議した。

「だから、ごめんって」

隆俊はわたしの言葉にただ謝るだけだった。

「この埋め合わせはちゃんとするからさ」

「そんな会社の予定なんて断っちゃえばいいじゃん」

わたしはいくらか感情的な口調になって言った。

「隆俊が言い出したんだよ。来月の記念日は豪華な食事しようって。それなのにさ」

「・・・ごめん」

「ごめんごめんって、それしか言えないの！」

わたしは怒鳴った。

わたしの言葉に、隆俊がまた小さな声で謝った。

長い沈黙があった。お互いに黙っていた。沈黙のなかに先週から降ったり止んだりを繰り返している雨の音が、何かの効果音のように静かに聞こえた。

「じゃあさ」

と、わたしは沈黙のあとで口を開くと言った。

「もし、埋め合わせをしてくれるって言うんだったらさ、明日会いに来てよ。東京に来てよ。隆俊、明日休みでしょ？」

「・・・そんなムチャクチャ言うなよ」

隆俊はほんとうに困ったような口調で言った。

「全然ムチャクチャなんかじゃないじゃん。ただ明日会いに来て  
って言ってるだけじゃん」

「だって明日は・・・」

わたしは隆俊の科白を最後まで聞かないで電話を切ってしまった。  
自分でもバカみたいだと思ったけれど、感情が高ぶって、涙が零れ  
てきた。哀しくて、寂しくて、悔しかった。楽しみにしていた予定  
を台無しにしてしまった隆俊のことが許せなかった。

そしてなにより、感情的になって、隆俊との関係に亀裂を入れて  
しまった自分の言動が許せなかった。今日ほんとうはこのあと隆俊  
に話そうと思っていた一人暮らしの予定ことなんかを思い出して、  
心の隙間を何かが無理に通り抜けていこうとしているような深い後  
悔の気持ちに駆られた。

そのあと、何度か隆俊から電話やメールがあったけれど、わたしは全て無視した。ほんとうは隆俊と仲直りしたい気持ちで一杯だったのだけれど、でもそれとはべつに、わたしのなかには子供のよう  
な、ふて腐れた、いじけた気持ちがあって、その気持ちが、わたしの意志とは正反対に、隆俊に対して冷たい態度を取らせた。

いつの間に、わたしはこんな人生の袋小路のような場所に迷い込んでしまったのだろう、と、彼女は自宅の窓の外に見える夜の闇を見つめながらため息をつく。

主人公の女の人が、夫も、また自分とはべつに浮気をしていることを知ってしまったのは、つい今日の昼間のことだった。

デパートで買い物をしているときに、彼女は偶然目にしてしまったのだ。自分の夫が誰か知らない女のひとと楽しそうに腕を組みながら歩いている姿を。

ふと、部屋の時計に目を向けると、時刻はもう深夜の十二時を過ぎようとしていた。でも、まだ夫は帰らない。

彼女は夫のケータイ電話に電話をかけようかと思った。今、どこで何をしているのか、聞いただそうかと思ったのだ。でも、彼女は思inaおしてやめた。自分だって浮気をしていたのだから、夫のことを責めることはできないと彼女は思った。

ただ、彼女は少し哀しいだけだった。色んなことが、何もかもが、音をたてて崩れていくような気がした。

いっそ、夫とは離婚すべきだろうか、と、彼女は考える。でも、そのあと自分はどうすればいいのだろう。自分にはもうどこにもいくあてがないように思えた。

彼女の不倫相手であるピアニストに、自分以外にも恋人がいることを知ったのは、一ヶ月ほど前のことだった。彼女の不利相手には、自分以外にも他に女がいたのだ。

それはまるで安っぽいドラマか何かのような展開だった。合鍵をつかって彼女が彼の部屋を訪れたら、彼が自分の知らない女と一緒にベッドに入っていたのだ。

彼にとって、やはり自分はただの遊びでしかなかったのだ、と、彼女は傷ついた。どこかでそんな気はしていたけれど、改めてその事実を突きつけられると、彼女はとても孤独な気持ちになった。自分は誰にも愛されていないのだ、と、惨めだった。

自分以外にも女がいることを知った彼女は、その場で振不倫相手とは別れた。

自分はほんとうにこれからどうすればいいのだろうかと彼女は途方に暮れる。

彼女は誰かに相談したいと思うのだけれど、こんなことを相談できそうな友人はひとりも思いつかない。

それから彼女はふと考える。もし、弟だったら、弟だったら、こんなとき、自分にどんなアドハイスをしてくれるだろう、と。彼女の弟なら、こんなとき、もっとも親身になって相談にのってくれる気がした。

でも、その弟は、いま側にいない。

わたしはそこまで読んだところで、本を閉じた。

三週間ほど前に読み始めた小説はたいぶ後半のページに入っていた。わたしは本を読むスピードが遅いうえに、手のあいたときなどにふと思いついて手を取る程度なので、なかなか物語が先に進まない。でも、あと一、二週間のうちにはなんとか読み終えることができるそうだった。

物語の雰囲気は常に暗くて、読み進めるのを断念しようかと何度も思うのだけれど、でもまたつい続きが気になって読み進めてしまう。

部屋の外で何かが割れる音が聞こえた。それから兄の怒声。また兄と父親が言い争いでもしているのだろうか。

最近、父親と兄の関係は前にも増して険悪な雰囲気になってきて



いる気がする。ほんとうに、以前テレビで観たニュースのような事件にならなければいいのだけれど、と、心配になる。

でも、就職することばかりを求める父親も父親なら、兄も兄だと思う。いい加減いい年齢なのだから、もう少し大人になればいいのと思う。そんなにマスコミの仕事に固執する必要があるのだろうか。あるいはマスコミの仕事に執着するのはいいとしても、たとえば何か他の仕事をやりながら、その道を目指すことだってできるような気がする。

## 16

わたしと兄がちょっとした口論になったのは、つい昨日のことだ。

仕事から帰ってきたわたしは自分の部屋に荷物を置いて、洗面所に行こうとした。そしてそのときに、わたしはその洗面所ではったり兄と遭遇した。

兄がわたしの向かおうとしていた洗面所にいたのだ。

鏡越しにわたしの存在に気がついたらしい兄はわたしの方を振り向いた。わたしはそこにまさか兄がいるとは思っていなかったので、咄嗟に言葉が出てこなかったけれど、とりあえずという感じでただいまと言った。

兄はわたしの言葉に無言だった。ただ怖い表情でじっとわたしの顔を見た。気のせいかもしれないけれど、兄の顔には泣いていたようなあとがあった。だから、わたしはなんでないているの？と冗談

めかして明るい口調で言った。

けれど、そのわたしの科白に、兄は怒声をあげた。「うるせえんだよ」と、兄は不機嫌そうな口調で言った。きっと虫の居所が悪かったのだろう。ついさっきまで父親と話していたか何かの関係で。

わたしはまさか兄に罵声を浴びせかけられるとは思っていなかった。たので、何も言葉が出てこなかった。

わたしが黙っていると、兄はわたしの顔を見て、「お前、俺のことをバカにしてるんだろ」と、突然、わたしにからんできた。

「俺がなかなか就職できないからって、バカにしてんだろ」

わたしは唐突に兄に文句をつけられて戸惑いもしたけれど、同時に腹が立ちもした。どうしてそんな思ってもみないことを言われなければならぬのだろうと理不尽に思った。

それでもなくも、わたしはその日、あまり機嫌が良いとは言えなかったのだ。

会社の後輩の高島さんが会社に来なくなったのは、つい一週間ほど前のことだった。最初の数日のうちは風邪でもひいたのだろうかと思っていたのだけれど、高島さんが会社に来なくなって数日経った、今日、わたしは上司から、彼女が会社を辞めてしまったことを知らされたのだ。

退社の理由は家庭の事情によるものだということがあったけれど、でも、それは建前で、彼女はきつとわたしのことが嫌いで、会社に

居ることが詰まらなくて辞めてしまったのだろう、と、感じた。

彼女が会社を辞めたことでどこかほっとしたのと同時に、わたしは傷ついた、寂しい気持ちにもなった。結局、最後の最後までわたしは高島さんに受け入れてもらえなかったのだ、と、心から何かが零れ落ちていくように孤独な気持ちになった。

だから、その想いもあったせいなのか、気がついたとき、わたしは兄向かってひどい言葉をぶつけてしまっていた。

「誰もそんなこと言ってないじゃん！自分のシュウカツが上手くないからって、わたしにあたらないでよね」

兄はわたしに反論されるとは思っていなかったのか、驚いたように黙っていた。わたしは無言でいる兄向かって言葉を続けた。

「だいたいいい年齢として夢とかやりがいとか青臭いこと語らないでよ。ひとは生活するために仕方なく働くんだよ。もう少し現実を見たら？兄ちゃん、もう二十七だよ？どうすんの？そんなので？これから？」

わたしはそれだけ言ってしまうと、兄から逃げるように背を向けて、自分の部屋へと戻った。そしてそれから、わたしは兄とは一言も口をきいていなかった。

隆俊と連絡を取らなくなってから、もう二週間が経過しようとしていた。とつくに隆俊との記念日も過ぎ去ってしまっていた。

最初のうちは隆俊から頻繁にかかってきていた電話もメールも、わたしがずっと無視を続けているうちに、やがてかかってこなくなつた。

このまま、隆俊とは別れてしまうことになるのかな、と思う。そう思うと、深い喪失感があった。正直、隆俊とはまだ別れたくはなかった。隆俊のことは好きだった。

でも、この前の一件以来、子供のように意地になってしまっている自分がいた。隆俊がわたしに対して誠意をみせてくれるまで、わたしの方からは連絡したくないという、屈折した、プライドのようなものがあって、それがわたしを素直にさせなかった。

週末はアパート探しの時間にあて、最近になってやっと、中野に、家賃の面からも、アパートの間取りの面からも、納得することのできるアパートをひとつ見つけることができた。もう既にそのアパートは契約していて、来月の頭、つまり二週間後には、わたしはそこに引越すことになっている。

やっと父親と兄の口論からも解放されるし、誰にも気を使わなくても良い、自分だけの空間が持てるというのに、わたしの気持ちはどこか弾まなかった。暗い日陰のなかにいるかのような冷たい虚しさ、引越しの準備をしていても常に心を離れなかった。

たとえば初めての一人暮らしで、新しい生活をはじめても、結局は今と何も変わらない毎日があるだけのような気がしてしまった。自分のこれからの生活に明るいビジョンを描くことが、どうしてもできなかった。

18

由香子から電話がかかってきたのは、金曜日の夜だった。わたしが自分の部屋で引越しの準備をしていると、ケータイの着信音が鳴った。着信音が鳴った瞬間、隆俊からの電話かもしれないと思って一瞬、期待したけれど、でも、ケータイのディスプレイには由香子の名前が表示されていた。

「もしもし、天野です」

由香子はわたしが電話に出ると言った。

わたしはわかっているというふうに、ただうんとだけ相槌を打った。

「どうしたの？」

と、わたしが訊くと、由香子はそのわたしの問には答えずに、  
「今、暇？」

と、逆に尋ねてきた。

「うん、暇といえば暇だけど・・・」

と、わたしが整理途中の荷物に視線を落しながら、そう歯切れの悪い答えを返すと、

「じゃあさ、これから一緒にドライブにいかない？」

と、由香子はいくらか唐突に提案してきた。

「ドライブ？」

と、わたしは由香子の予想外の提案にちょっと驚いて言った。由香子が車を持っていることは知っていたけれど、これまで一緒にドライブに行ったことは一度もなかった。

「ちょっといきなりだね」

と、わたしが笑って言うのと、由香子もつられるように軽く笑って、「なんか急に車が運転したくなって。それで誰か一緒にいくひいないかなって思ったら、良美の顔が浮かんだの」

「あんだ、わたしのこと、暇なひとだと思ってるでしょ？」

わたしが笑ってからかうように言うのと、

「思ってるかな」

と、由香子も笑って冗談で返した。それから、少し間があって、

「もちろん、無理だったら、いいけど」

と、由香子は小さな声で付け加えて言った。

わたしは部屋の時計に目を向けてみた。時刻はあともう五分ほどで日付が変わろうとするところだった。

「うん、いいよ。ドライブ行こうよ」

わたしは明るい口調で言った。引越しの準備をするのにも少し疲れたし、気分転換にちょうどいいかもしれないとわたしは思った。

由香子はじゃあわたしの家の近くのコンビニ着いたら、また電話すると言って、電話を切った。

## 19

それから三十分程あとに由香子から電話がかかってきて、わたしが家の近くのコンビニまで歩いていくと、由香子がコンビニのなかで雑誌の立ち読みしているのが視界のなかにはいった。

わたしがコンビニのなかに入っていくと、由香子はすぐにわたしのことに気がついて、笑顔で手をあげた。彼女は読んでいた雑誌をもとの棚に戻すと、わたしの顔を見て、

「ごめんね。急に呼び足りして」と、謝った。

わたしは微笑んで首を振った。

コンビニでペットボトル入りの紅茶を買うと、わたしたちはコンビニを出て、由香子が運転してきた車に乗り込んだ。

由香子が運転してきた車は、黒のスポーツタイプのものだったの  
で、わたしはそれが可笑しくて少し笑ってしまった。由香子はとて  
も女の子ぽい可愛らしい顔立ちをしているのに、その趣味は、外見  
とは対照的にすごく男ぽいところがあって、そのギャップが面白い  
なとわたしはいつも思う。

わたしが黙ってニヤニヤしていると、由香子はわたしの顔を見て、  
なにが面白いの？と不思議そうに訊いてきた。わたしは曖昧に微笑

んでなんでもないと答えておいた。

「どこか行きたいところとかある？」

と、由香子は車のエンジンをかけると、わたしの方を振り向いて尋ねてきた。わたしは咄嗟に何も思いつかなかったので、どこでもいいよと答えた。

「じゃ、わたしが適当に決めちゃってもいい？」

と、由香子はそう言うと、車についているカーナビに目的地をセツトして、車を走らせはじめた。

「どこに行くことにしたの？」

と、わたしは車が動き出すと、尋ねてみた。すると、由香子はちらりとわたしの顔に視線を走らせて、それからまたすぐに前方に視線を戻しながら、

「とりあえず、お台場あたりにでも行ってみようかなって」

と、明るい口調で答えた。

「お台場なんて何年ぶりだろう」

と、わたしは小さく笑って頷きながら、そういえば、学生の頃、お台場には隆俊とよく行ったな、と、懐かしくなった。まだ付き合い始めて間もない頃のことだ。

それから、ふいにわたしの心は暗く沈んでしまった。もしかしたら、もう、わたしは隆俊を失ってしまったのかもしれないのだ。そのことを、今更のように思い出した。

由香子の運転する車は、夜の街なかを心地よいスピードで走りすぎていく。わたしは窓の外を流れていく景色にぼんやりと視線を彷徨わせた。



夜の街のイルミネーションはきれいだった。そしてきれいなのと同時に、どこか儚げでもある。街灯の光の淡いオレンジ色かがった光や、ときどき思い出したように目に飛び込んでくる派手な看板の光は、わたしの心の底の方に沈んでいるいつくもの思い出を揺り動かしていた。

それはずっと昔の、大学生の頃に、学食で友達となんでもない世間話をしているときの光景だったり、あるいはいつかどこかで観た春の明るい日差が世界を優しく輝かせている光景だったりした。目を閉じると、いつでもすぐにその場所に戻ることができるような気がした。知らないあいだに、ずいぶん色んなたくさんのことが、遠い過去の出来事になってしまったんだな、と、わたしは心に少し冷たい水が染みこんでいくように感じた。

「・・・こうやってドライブしてるとき」

と、わたしが黙って自分の思考のなかに沈んでいると、由香子が口を開いてゆっくりとした口調で言った。わたしは窓の外に向けていた視線を、由香子の顔に向けた。

「こうやって友達とドライブとかしてるとき、なんか大学のをときを思い出すよね」

と、由香子は楽しそうな口調で続けた。

「あの頃は時間だけはあったから、こうやって夜遅くに友達みんなでよくドライブとかしたなって思って」

「そうだね。あの頃はほんとに毎日が休みみたいな感じだった」

わたしは大学生の頃ことを思い起こしながら軽く笑って答えた。

「よく寝坊して自主休学とかしてたな」

由香子は苦笑交じりに言った。

「大学の頃の友達とは今でも結構連絡取り合ったりしてる？」

と、わたしはふと思いついて尋ねてみた。すると、由香子は、  
「たまにね」

と、どこか寂しげな微笑を口元に浮かべて答えた。

「仲の良かった子、何人かとは今でもたまに連絡取ってるかな。でも、昔に比べると、だいぶ疎遠になっちゃったけどね。・・・ふたりくらい、この前結婚した子がいて」

「わたしの友達にも何人か結婚して子供とかいるひといるな」

「・・・なんかどんどん変わっていったっちゃうね」

と、由香子はわたしの科白に何か思いを巡らせるように数秒間黙っててから、やがて口を開くと、小さな声で言った。

「大学を卒業してから、色んなことが急激に変わりすぎて、ときどきそのスピードに上手くついていけなくなる時があるなあ」

由香子はどこか遠くを見るような眼差しをして、静かな口調で言った。

「・・・それは仕事のことだったり、恋愛のことだったり、色々だけど・・・でも、急に人生が具体的に動きだして、それで戸惑ったり、疲れちゃったりするかな・・・自分がこれから向かおうとしている場所が、上手くつかめなくて、途方に暮れちゃう感じ。わたしはどうしたいんだろうって」

由香子はそう言ってから、自分が口にした言葉を冗談に紛らわすように微笑に笑った。水気を帯びたような笑い方だった。

「わかる気がする」

わたしは由香子の言葉に口元で小さく笑った。

気がつく、由香子の運転する車は首都高を走り始めていた。車はビルとビルの隙間を縫うように走っていく。とても大きなビルがすぐとなり迫ってきて、まるで自分がSFのなかの空飛ぶ車に乗って建物と建物のあいだを飛んでいるかのような不思議な感覚に捕らわれる。

ビルのところどころにはまだ窓の灯りがついているところがあって、こんな夜遅くに働いているひとたちがいるんだな、と、当たり前なことではあるけれど、自分とは違う、全く別の人生や、時間の流れ方があることに改めて気がつかされる。

「・・・この前ね、彼氏と話し合ってきた」

わたしが黙っていると、由香子が思い出したように言った。

「・・・この前ね、彼氏と話し合ってきた」

わたしが黙っていると、由香子が思い出したように言った。

わたしが由香子の方を振り向くと、

「それで、やっぱり別れることになった」

と、由香子は短く告げた。そして由香子はわたしから自分の感情を隠すように、いくらかぎこちなく口元を笑みの形に変えた。

わたしが咄嗟のことに上手く答えられずにいると、

「・・・ちゃんと謝ったし、まだ別れたくないって言ったけど、でも、彼氏はもう、わたしとは付き合うつもりはないって」

由香子は淡々とした口調で続けた。由香子の顔に浮かんでいた笑顔は、少しずつ花が枯れて萎れていくようにその形を失いつつあった。

「・・・そっか」

と、わたしはどう答えたらいいのかわからなくて、ただ相槌を打った。

「でも、そりゃあ、そうだよね。わたし、彼氏の音楽のこと、好きなことを、あんなふうに、何か悪いことのように言っちゃったんだもんね。・・・そりゃあ怒るよなって思う」

由香子は自嘲気味に小さく笑って続けた。

「・・・たとえば本心じゃなくても、ひとが大切に想っていることを、目指しているものを、あんなふうに言うへぎじゃなかったなって、

今更だけど、つくづく思う」

由香子はそれまで口元に浮かべて笑みを消して、少し小さな声で言った。哀しそうな声だった。

わたしは由香子の科白に耳を傾けながら、ふと自分がこの前に兄に対して口にしてしまった言葉のことを思い出した。兄のやりたいと思っていることをあからさまに否定するような言葉。わたしは後ろめたい気持ちになった。やはりあんなことは言うべきじゃなかったな、と後悔した。たとえ自分がどんなに精神的に参っていて、苛立っていたとしても、あんなふうに言うべきじゃなかったな、と感じた。

「・・・でも、少し時間をおいてから、もう一度彼氏に謝ってみた  
ら？」

と、わたしはしばらくしてから遠慮がちに言ってみた。

「時間が経ったら、彼氏の気持ちも変わるんじゃない？」

そう言ったわたしの言葉に、由香子は弱く首を振って、

「たぶん、今回はもう無理だと思う」

と、由香子は言ってから、ため息をつくように微かに笑った。

「だけど、でも、もういいの」

と、由香子は未練を振り切ろうとするように少し明るい口調を装って続けた。

「べつに喧嘩別れとかしたわけじゃないから・・・ちゃんと話し合  
って、それで納得して別れたから・・・わたしはわたしの思ってい

ることを伝えたし・・・それで彼も、わたしが本気であんなことを口にしたわけじゃないことだけは、たぶん、わかってくれたと思うから・・・これからは彼氏は自分の音楽に集中するし、わたしはわたしで自分のために時間を使う・・・それでいいかなって思う」

由香子は口角を軽く持ち上げて、自分に言い聞かせるようにそう語った。

車の窓から差し込む街灯の光が、彼女の顔を半透明の淡いオレンジ色の色素に染めていた。

20

やがてわたしたちはお台場に辿り着くと、車を止めて、少し散歩することにした。わたしたちが車を止めたすぐ近くには、遊歩道があつて、わたしたちはその遊歩道をなんでもない世間話をしながらゆっくりと歩いた。この前食べに言った美味しいレストランの話。共通の知人に関する話題。最近観た映画の感想。

わたしたちが歩いている遊歩道はデートスポットになっているらしく、道行くあいだに幾人ものカップルとすれ違った。みんな楽しそう笑ったり、ふざけあつたりしていた。

風は冷たくて、吐く息は凍りつくように白く煙った。

湾外沿いにはレインボーブリッジや、その他の大きな建物の光がいくつも見えて、それらの光は連なりあつて、湾の形を夜の暗闇の

なかにくつきりと浮かびあがらせていた。

遊歩道をしばらく歩いていくと、お台場からの景色を一望することのできる場所があったので、わたしたちはそこで立ち止まると、お互いに黙ってそこから見える景色を眺めた。

ふと気になって、何気なく由香子の横顔に視線を向けてみると、その瞳のなかには、失ってしまった何かを思い起こしているような、淡い光があるように思えた。きっと彼女は、別れてしまった恋人のことを考えているんだろうな、と思った。

わたしは由香子に対して何か言葉をかけようと思ったけれど、結局、思い直してやめた。どう声をかけたらいいのかわからなかったということもあるけれど、でもいまはひとにあれこれアドバイスされるよりは、ひとりでゆっくりと自分の気持ちと向き合いたいんじゃないかなと思ったからだ。

わたしは由香子の横顔に向けていた視線を前に戻すと、そこから広がっていく景色を眺めた。

目の前に広がるたくさんの暖かい光の粒は、優しく、わたしの目を打った。街の光は網膜から静かにわたし意識のなかに沈み込んでいくと、やがて意識の底に辿りいついて、そこに沈んでいた、忘れかけていた、いくつかの記憶を震わせていった。

途端に、わたしは何を思い出しそうになった。

それはとても大切で、とても懐かしい記憶だという感触があった。たとえば五月のまだ若々しい木々の葉にろ過されて地上に降るやわらかな日の光のような。

最初その記憶は、輪郭を失った曖昧な形で思考の表面ににじみだしてきて、そのうちにそれは花のつぼみがふくらんで花卉が放射状に広がっていくように、もとの形へと戻っていった。

それはずっと幼い頃の記憶だった。兄との記憶。



あれはたぶん、わたしが幼稚園生のときだ。そのくらいの頃に家族で群馬に旅行にいったことがある。

そのときわたしたち家族は山にハイキングに入ったのだけれど、わたしはそこで家族とはぐれて、迷子になってしまった。

迷子になってしまったのは、みんなで山道の途中で休憩を取っているときだった。そこでみんなは座って水筒の水を飲んだり、ハイキングに来る前に買ってきたお菓子を食べたりしていた。でも、そのうちにわたしはじっとしているのが退屈になってきた。

だから、わたしはそのへんをひとりでふらふらと歩きまわりはじめた。背中越しにお母さんのあんまり遠くにいつちゃだめよという声を聞いたことを覚えている。

しばらく歩いていると、わたしは一匹の蝶々を見つけた。それは淡い青色の、とてもきれいな蝶々だった。わたしはその蝶々を捕まえようと思った。捕まえて、家族に自慢しようと思ったのだ。でも、蝶々はわたしが捕まえようとして手を伸ばすと、すぐに身を翻して逃げてしまう。

しばらくのあいだ、わたしと蝶々の追いかけっこは続いた。わたしが諦めて家族のもとに戻ろうとすると、蝶々がまるでわたしのことを誘うように、あるいははからかうように、草の上に止まって羽を

休めたりするのだ。それでわたしもむきになって、また捕まえようとして手を伸ばす。すると、また蝶々が逃げる。その繰り返しだった。

そしてそのうちにわたしは完全に蝶々を見失ってしまった。それほどばかりか、気がついたときには、わたしは見ただこともない山道のなかに迷いこんでしまっていた。

周囲にはとても大きな木々かいくつも聳え立ち、その木々の葉が風に吹かれて揺れると、それは目の前の木々たちが、わたしにはわからない言葉で何かをささやきあっているように聞こえた。声を限りにお父さんとお母さんと呼んでみるのだけれど、誰も返事をしてくれない。

自分が立っている場所から真っ直ぐに道が続いているけれど、果たして自分がどちらの方向から歩いてきたのか検討もつかなかった。前からだったような気もするし、後ろからだったような気もする。というより、視界に広がっている地面全てが道のように見えてしまった。

近く木の枝で一匹の鳥が鋭い鳴き声をあげて、それはまるでわたしに何か警告を与えているようにも思えた。早くここから出て行けと。

わたしは途端に心細くて、不安な気持ちで一杯になった。もしかしたら、自分はもう一生この山のなかからもとの世界に戻ることは

できないんじゃないかという強い恐怖に捕らわれた。知らないあいだ大粒の涙が頬を伝って、お母さんが用意してくれたお気に入りの洋服を濡らした。

わたしは走り出した。とりあえず前に向かって。

走り始めると、案外すぐにもとの場所に戻れるような気もしてきた。意外とすぐそこに家族がいて、笑顔でわたしのことを出迎えてくれるんじゃないか。そんな気がしてきた。だから、自然とわたしの走る速度は速くなった。

けれど、やはりそれはそんな気がしたただだった。走っても、走っても、見覚えのある景色は現れなかった。逆にますます森は深くなり、さっきの名前の知らない鳥がわたしを追いたてるようにけたたましく鳴く声が聞こえた。

次第に日は傾き始めて、周囲の空間は淡い闇に覆われはじめた。水で薄めたような半透明の青色がかった闇。

どうしようとしたしはパニックになった。大きな声で泣いても、誰も助けにはきてくれない。

と、そのとき、わたしは視界のさきに誰かの人影を見たように思った。一瞬だったのでよくわからなかったけれど、そのひとは赤い洋服を着ていたように思った。

きっとお母さんだ、とわたしは反射的に思い込んだ。今日お母さんは赤い服を着ていたから、心配になったお母さんがわたしのことを探しに来てくれたのだ、と、思った。

わたしは長時間走り回って疲れ果てていたけれど、最後の力を振り絞って、そのさっきの人影が見えたように思えた空間に向かって走り出した。

と、その瞬間、わたしの視界は大きく斜めに傾いた。木の根っこに躓いて、転んでしまったのだ。上手く受身がとれなくて、派手に込んでしまった。膝がすりむけて、傷口から思った以上にたくさん血が溢れでた。

もう、だめだ、と、わたしは思った。わたしはここで死んでしまうのだと幼いわたしは大袈裟に絶望的な気持ちになった。いつか何かで観たテレビ番組のように、目の前にある木の幹に、目と鼻と口ができて、今にもわたしに襲いかかってくるような妄想に捕らわれた。

わたしは蹲ると、顔を覆ってしくしくと泣きはじめた。蝶々なんて追いかけるんじゃないかと強く後悔した。どうしてお母さんの言いつけを守らなかったのだろうと思った。お母さんやお父さんやお兄ちゃんの顔を思い出して、ひどく哀しくなった。もう、みんなに会うことはできなんだ、と、思った。

それからどれくらいの時間が経過しただろう。ずいぶんたくさん

の時間が経過したように思えたけれど、実際にはそんなに長い時間ではなかったのかもしれない。

ふいに声が聞こえた。懐かしい声だった。

「こんなところにいたのかよ」

その懐かしい声は、ちよつと不機嫌そうな口調で言った。

顔を覆っていた両手をどけると、そこには、わたしと二つ違いの兄が、少し息を切らしながら、呆れた表情を浮かべて立っていた。もしかしたら、走ってここまで探しにきてくれたのかもしれない。

わたしは立ち上がると、嬉しくて、思わず兄に抱きついてしまった。

「暑いからくつつくなって」

と、兄は迷惑そうに言うのと、自分からわたしの身体をひきはがした。そしてそのかわりにとでもいうように、わたしに向かって右手を差し出した。それから、

「帰るぞ」

と、ぶっきらぼうな口調で言った。

わたしは、うん、と、頷いて、すぐに兄の手を取った。兄の手はとても力強くて、とても暖かく感じられた。

あとで聞いた話によると、わたしがいなくなってしまったことに気がついた家族は、すぐに父と母で手分けしてわたしのことを探しはじめたらしい。兄は危ないから待っていないさいと両親に言われた

らしいのだけれど、父と母が探しにいつてからしばらくしても戻ってこないで、心配になった兄は、自分でもわたしのことを探しに出かけてくれたらしい。

一方間違えれば、あやうく、わたしも迷子になっていたころなのだけれど、幸い、そういうことにはならず、なにより一番最初に、兄がわたしのことを見つけてくれたのだった。もし、あのとき兄がいなかったから、と、わたしは思う。

考えてみると、ずいぶん色んなところでわたしは兄に助けられていたのだ。わたしが父親と喧嘩して家出したとき、迎えにきてくれたのも兄だったし、わたしが大学受験で第一志望の大学に落ちてしまったとき、それとなく慰めの言葉をかけてくれたのも兄だった。幼いとき自分が食べるぶんを我慢して、わたしにお菓子をゆずってくれたのも兄だった。どうしてそのことを忘れていたのだろうとわたしは思った。

「なに考えてるの？」

ふいに、となりで由香子の声が聞こえた。

少しぼんやりとしていたからちょっと驚いて由香子の方を振り返ると、由香子はわたしの顔を見て、可笑しそうに笑った。

「うん、ちょっと色々ね」

と、わたしは曖昧に微笑して答えた。

「由香子は明日は何するの？」

と、わたしは取り繕うように尋ねてみた。明日は土曜日で休みだ。

由香子はわたしの間に思案するようにうーんと唸ってから、「とりあえず、寝る、かな」と、笑って答えた。つられるようにしてわたしも少し笑った。

冷たい風が吹きぬけていった。わたしは思わず寒さに身を縮めた。

「引越しの準備は進んでるの？」

と、わずかな沈黙のあとで、由香子が尋ねてきた。わたしが今度引越しすることにしたことはこの前電話したときに由香子には話してあった。

「若干遅れ気味だけど、なんとか」

わたしは苦笑するように口元を綻ばせて答えた。実を言うと、まだ半分も進んでいなかった。少しペースアップをしなければならぬ。

「良美が引越したらさ、遊びに行っていない？」

と、由香子は笑顔で言った。

「うん。来てよ。ぜひぜひ」

わたしは由香子の間に答えながら、はじめてこれから一人暮らしをはじめることが楽しみになった。

「じゃあ、毎日遊びにいつちやうから、覚悟しといて」

と、由香子はわたしの科白にそう冗談めかして答えると、軽く笑った。わたしも由香子の笑顔に誘われるようにして、少し笑った。

ふと、夜空に視線を向けると、そこには半分欠けた月が、優しく透き通った光をそっと放っていた。

## 23

それから、引越しの予定日はあっけなく訪れた。

わたしが依頼した引越し業者は実に手際よく、わたしの荷物を引越し先のアパートまで運んでくれた。

引越し業者が荷物をアパートに運び入れて帰ってしまうと、わたしは早速、荷物の荷解きにとりかかることにした。



八畳程の空間が引っ越し業者のマークのついたダンボールで埋め尽くされていて、途方に暮れてしまう。ついさっきダンボールに詰めたばかりなのに、今度はその逆のことをすることになるのかと、うんざりした気持ちになる。とはいえは、このまま放置しておくわけにもいかないのです、とりあえずという感じで比較的簡単に片付けられそうな小さなダンボールから開封しはじめる。一応、あとで由香子の手伝いにきてくれることになっている。でも、それまではひとりで頑張るしかない。

ほんとうは家族に手伝ってもらうつもりでいたのだけれど、母は今日昼からパートに出かけていて、父は父でどこかに出張にいつている。兄には引越しの手伝いなんて頼みづらくて、頼むことすらしていない。

でも、あの日から、二週間ほど前にちょっとした口論になってから、今日、久しぶりにわたしは兄と会話を交わした。

わたしが自分の部屋から荷物を運び出していると、兄が後ろから声をかけてきたのだ。

「ほんとに出て行くのかよ」

と、兄はちよつと不満そうな、それでいて、どこか名残惜しそうな口調で言った。

わたしは兄の方を振り返ると、荷物を抱えたまま、

「うん」

と、頷いた。どんな表情を浮かべたらいいのかわからなかった。

兄はわたしに声をかけたのはいいものの、それからどう言葉を続けたらいいのかわからない様子でしばらくのあいだ黙っていた。わ

たしも何を話したらいいのかわからなくて黙っていた。少し居心地の悪い沈黙が数秒間続いた。

そしてそれから、兄は、

「一人暮らし、頑張れよ」

と、俯き加減にぶっきらぼうな口調で言った。

わたしは兄からまさかそんな科白がでてくるとは思っていなかった。で、咄嗟に何も言葉がでてこなかったけれど、少し間をあけてから、

「ありがとう」

と、どうにか答えた。それから、

「お兄ちゃんも、シユウカツ頑張ってね」

と、言った。

兄はわたしの言葉にどこか不機嫌そうな表情で黙って頷いた。それから、兄はわたしに背を向けると、何も言わずに、自分の部屋がある方へ向かって歩いていった。

ダンボールのなかから荷物を取り出しながらぼんやりとわたしは考えた。どうして兄はあるとき、急にわたしに励ましの言葉なんてかけてくれる気になったのだろう、と。あるいはあれはお前がいなくなっただけという意味の皮肉だったのだろうか。そうは思いたくはなかったけれど、でも、もし仮にそうだとしても、わたしは嬉しかった。兄と言葉を交わすことができて。

二週間前から兄とは一度も口をきいていなかったから、わたしはこのままもしかしたら、兄とは一生に口をきかないいまになってし

まんじやないかとひそかに心配していたのだ。でも、そうじゃなくて良かったと安堵した。少なくとも、今日兄はわたしに話しかけてくれた。頑張れよと励ましの言葉をかけてくれた。

そう言った兄の真意はわからないけれど、でも、兄は確かに、わたしと口をきいてもいいとは思ってくれたのだ。そしてなにより、頑張れよと言ってくれたその言葉は、決して皮肉なんかじゃないとわたしは思った。思いたかった。

昔も、今も、兄は変わっていないのだ。たぶん。ただ色々上手くいかないことが続いてしまったせいで、少し苛立っているだけだ。これから先、兄にとって良い結果が出るようにとわたしは心のなかで祈るようにそっと思った。

荷解きが三分の一ほど終わったところで、ちょっと休憩することにした。今ダンボールのなかから取り出したばかりのガラスのコップに、ここに来る前に買ってきたペットボトル入りのお茶を入れて少し飲む。それから、鞆のなかから一ヶ月ほど前からずっと読み続けている小説を取り出して広げる。小説はいよいよ終盤にさしかかってきていて、あともう少しで読み終えることができそうだ。

主人公の女の人は、夫もまた自分とはべつに浮気をしていることを知って、途方に暮れる。

浮気相手の男も、決して自分のことを愛していたわけではなかった。彼女はもう自分にはどこにも行き場ないように思える。

誰も自分のことを愛してくれるひとはいないのだ、と、思いつめてしまう。こんなとき、親身になって相談になってくれそうな弟と連絡を取る術もない。いっそ、死んでしまおうか。彼女はそんなふうに考える。

そうだ、死のう。どうせ生きていてもこれから先いいことなんて何もないだろう。死ねば楽なれる。

悲観的な気持ちになった彼女は家を出ると、行き先も決めずに電車に乗り、色んな街を点々とする。死に場所を求めて。

一体どこで死ねば誰にも迷惑がかからないだろう。山だろうか。海だろうか。色んな街を点々としながら、ちらりと彼女は幼い息子のことを考える。

息子は実家にあずけてきた。自分が死んでしまったら幼い息子は哀しむだろうか。でも、彼女はもうどうでもいいと無責任に思う。何かを考えることがすごく億劫に感じられた。

そのうちに彼女が辿り着いたのは鳥取にある海沿いの街だった。そこで彼女はふらりと喫茶店に入る。そこで彼女は店の壁に一枚の

絵画が飾ってあるのを見つけて、驚く。なんとそれが、自分を描いた絵だったからだ。まだ今よりもずっと若い頃の自分を描いた絵。

どうしてこんな絵が存在するのだろうかと彼女は不思議に思う。そしてこの絵の少し哀しくて、でも、透明感があって優しい雰囲気は、弟が描く絵に似ていると彼女は考える。そうだ、これはたぶん弟が描いた絵に違いない。

興奮した彼女は喫茶店の主人に、一体この絵をどこで手に入れたのですか？と尋ねてみる。すると、喫茶店の主人は、自分が以前フランスに旅行にいったときに、道端で自分の絵を売っていた日本人の男から買ったのだ、と、教えてくれる。この絵のことが一目で気に入って、それで思わず買ってしまったのだ、と。

彼女がその日本人の名前を教えてくれと頼むと、喫茶店の主人が彼女に教えてくれたのは、彼女の弟の名前だった。

弟はフランスにいる！そして今でも諦めずに絵を描き続けている！そのことを知った瞬間、彼女は心に暖かい光が差し込んだように何故か明るい気持ちになった。雲に切れ間ができて、そこに青空の欠片を、希望へと続く、微かな道しるべを見つけたような気持ちになった。

気がつくくと、不思議とそれまで心を覆っていた絶望はどこかへ消え去り、あとには穏やかな気持ち広がっていた。もちろん、哀しみが消えてなくなったわけではなかったけれど、それでも、その哀しみをきちんと受け止めて、前に向かって進んでいこうというような、静かな決意のようなものが彼女の心のなかには生まれていた。

彼女は思う。死ぬなんてやっぱり馬鹿げている、と。たとえば誰か

らも愛されていなかったとしても、それで構わないじゃないか、と。少なくとも、自分には必要としてくれている人がいる。少なくとも、幼い息子は自分のことを必要としてくれているし、その幼い息子のためにも自分はこれから生き続けようと彼女は思う。

彼女は喫茶店を出ると、電車に乗る。自宅のある東京に向かって。東京に着いたら、夫との関係をはっきりさせるようと彼女は思う。離婚するにしても、しないにしても、まず自分の気持ちをはっきり伝えようと彼女は思う。

そして、すべてが終わったら、弟を訪ねてフランスに行こうと彼女は決意する。そして弟に会って、まず謝罪するのだ。あのとき、弟の味方をしてあげられなかったことを。そのことをずっと後悔してきたことを。そして自分は弟の描く絵が好きだと思っていることを、伝えようと彼女は思う。

物語を読み終えたとき、まるで主人公の女のひとの心情がそのままわたしの心のなかに投射されたように、清々しい気持ちわたしの心のなかには広がっていた。わたしはそれまで読んでいた本を閉じると、座っていたフロリングの床から立ち上がった。そしてまだカーテンをつけていないヴェランダの方までゆっくりと歩いていく。

ヴェランダの窓からは、空を見ることができた。少し雲がかかっているけれど、完全な曇り空ではなくて、ところどころに青空が覗いている。その青空は冬特有の、色素の薄い、冷たそうな感じのする青空だった。

ケータイの着信音が鳴ったのは、そのときだった。ポケットのなかに入っていたケータイを取り出して着信を確かめてみると、そこには隆俊の名前が表示されていた。

わたしは電話に出ようかどうかしようかすごく迷った。あれほど隆俊と別れたくないと思っていたはずなのに、いざ隆俊から電話がかかってくると、またそれとは違うべつの想いが、いじけたような弱い気持ちがかみ上げてきて、電話に出ることを躊躇わせた。どうして今まで連絡をくれなかったのか、今更どうしてといったような、子供じみた素直じゃない気持ちか頭をもたげた。

わたしはケータイに落としていた視線をもう一度空に向けた。空にはいくつもの雲が間隔をあけてぽつんぽつんと浮かんでいた。ひとつひとつの雲は大きくて、青空のあいだに浮かぶそれらの雲はさながら流水か氷の塊のように見えた。そして日の光はそれらの雲を抜けてそっと地上を照らす。日の光は氷を溶かすように雲を抜けて、その下に広がる町を、人々の生活を静かに輝かせる。

ケータイの着信音はまだ鳴り続けていた。わたしは少し迷ってから電話に出た。

「もしもし」

と、わたしは言った。少し怒っているような、それでいて嬉しそうな声で。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5572g/>

---

日の光は氷を溶かすように雲を抜けて

2010年10月8日14時51分発行